

23	課題番号	研究課題名	研究代表者	評価結果
	15109008	人工肝臓に用いる形質転換ブタの生産	幕内 雅敏 (東京大学・医学部附属病院・教授)	B
<p>(意見等)</p> <p>重症肝不全患者の肝臓機能を代償するバイオ人工肝臓の開発のソースとして形質転換ブタの生産と、ヒトアルブミン等のタンパク供給母体としての形質転換ブタの生産の2つをテーマにもったユニークな研究である。しかしながら、研究期間内に発生工学的手法により誕生しえた形質転換ブタは、わずかであり、その後生産されたクローンブタすべてが生後2週間前後で死亡したと報告されていることから、「人工肝臓システムを開発し、肝不全患者の治療に用いる」とした当初の研究目的が十分達成できたとは言えない。</p> <p>一方、生産を試みたブタは死産または生後早期に死亡した結果になったものの、いくつかの臓器でヒトアルブミンの産生が確認できている。このことは、一部ではあるもののヒト型に形質を転換したブタを生産することが可能であることを示す事実であり、注目に値する。しかしながら、ヒト型タンパクを作り出す手法には、本法以外にもいくつかもあり、必ずしも本法でしかできないものでもない。このことから産生の効率やコストなどまだまだ解決すべき大きな問題が残っている。</p> <p>いずれにしても、形質転換ブタの生産についての可能性を高めたことで、人工臓器の開発や異種動物によるヒト型タンパクの生産に一定の道筋をつけた点は高く評価できる。</p>				
24	課題番号	研究課題名	研究代表者	評価結果
	13854021	口腔疾患における免疫補助シグナル分子の機能解析とその臨床応用にむけた展開	東 みゆき (東京医科歯科大学・大学院医歯学総合研究科・教授)	A
<p>(意見等)</p> <p>免疫学的視点に立ち、補助シグナル分子の同定、その機能解析により、様々な口腔疾患のメカニズムの解明をめざした、稀有な研究である。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 補助シグナル分子の発見とその機能解析において先導的成果をあげている。</li> <li>2. T細胞、組織抗原提示細胞、樹状細胞、破骨細胞、上皮細胞、口腔がん細胞における補助シグナル分子の関与について多くの科学的情報を生み出し、口腔免疫学の発展に寄与した。</li> <li>3. コラーゲン関節炎、I型糖尿病、実験的脳脊髄炎、慢性大腸炎などの自己免疫疾患モデルを用いて、学術的価値の高い成果が得られている。</li> <li>4. 研究成果は国際的に評価の高い学術誌に多数報告されており、十分に情報が発信されている。</li> <li>5. 個々の研究成果の基礎学術的価値は高いが、それらの有機的連携を強め、本研究の最終目標である、“口腔疾患における新しい免疫制御法開発” に結びつく応用的研究成果としてまとまっていれば、さらに評価は高まった。</li> </ol>				